

○ 第6回「ハートミーティング」 意見交換の内容について

プロジェクト
チーム
事務局

9月11日に30名でスタートしたチームのメンバーから、本日、10名が代表して参加している。10年後の夢だけでなく、大いにはみだした意見が出ることも期待している。

現在、AからDの4つのユニットを構成して、検討しており、まずは、各ユニットの代表者から活動内容の説明をさせていただく。

メンバー

Aユニット「創造都市」では、京都の魅力や地域資源などの強みを生かして、京都経済を活性化するための方策について検討している。

私自身は、経験者採用で市役所に入り3年目。以前、勤務していた旅行会社での経験を生かしていきたい。

メンバー

通常業務では、産業観光局に所属し、「ものづくり」の観点から京都経済の更なる活性化を図るためのスーパーテクノシティ構想を担当している。産業振興だけを捉えて検討を進めるのではなく、関係する他の分野も必要と感じ、このチームに参加した。

メンバー

いい経験になると思い参加した。

メンバー

Bユニット「^{きょうと}京スタイル・したはる？」では、環境・観光・交通を融合させて、市民や観光客の皆さんに新しいライフスタイルを提案する方法について検討している。

私は入庁3年目で、10年後の未来像を実現していくころには中堅になっている。そのときに精力的に仕事をするためにも、このチーム活動に参加したものである。

メンバー

私は、「^{きょうと}京スタイル・したはる？」の中でも特に、自転車を活用したライフスタイルについて検討する「京・チャリスタイル」を担当している。私は消防局職員であり、地域に出て、第一線の現場で仕事をしたいと思っているが、現在は消防局の本庁で、事務的な業務を担当している。今後、事務の能力を上げていきたいと考えており、また、消防の枠にとらわれない行政の広い目を養うことで、市民の生命身体財産を守っていきたいと考え、このチームに参加した。

メンバー

Cユニット「広がる共助、変わる公助、新しいコミュニティの擁立」では、全世代が何らかの形につながっていると実感できる地域社会の形成、

地域や学校、NPO等が連携した横断的な新しいコミュニティの形成について、検討している。メンバーは、37歳以下で構成しているのだが、当初は、年齢や、独身、既婚などの違いによって、地域コミュニティの捉えかたもバラバラだった。まずは地域コミュニティとは何か、から検討に入った。幅広い層の市民の皆様に御参加いただき、京都のまちづくりについて議論していただいている「京都市未来まちづくり100人委員会」にも参加させていただいた。

メンバー 私は入庁15年目になる。京都育ちで京都の大学を出て市役所に入った。普段は福祉事務所に勤務しているが、京都市の政策形成に関わることのできるこの取組に、一度参加してみようという軽い気持ちで参加した。参加してみるととても楽しい。周りの同年代の人を見ると気力が低下している者もいる。このチームのように若い人たちとの交流等が必要ではないかと感じている。

メンバー 私は環境政策局で労務を担当している。庁内向けの仕事が多い。今回は、基本計画策定のプロセスを見てみたくて参加した。

メンバー Dユニット「U24サポーター」は、若い世代へのサポートに焦点を当てながら、サポートされていた側がサポートする側に回ることにより、すべての世代が互いに関わり、支え合うことのできる仕組みづくりについて検討している。

私は入庁2年目で、局の運営方針、行政評価を担当している。市全体の業務が把握できていないので、この機会に知りたいと思っている。

メンバー 私は、経験者採用で入庁し、2年目になる。土木技術職である。私も市全体の業務は把握できていなし、日々の業務では市民の皆さんに貢献していると感じることも少なく、色々な人たちの意見を聞くだけでも経験を増やしていけると思い、このチームに参加した。

市長 皆さんが、日常の業務に加えて、自ら参加し、自分の仕事に直接関係していないことをやっているところがいいね。

市役所の業務は全体をとらえるのが難しい。例えだが、ただ単に、木を削り、柱を立て、家を建てると考えるか、住民にとって住みやすい家を建てると考えるか、住みやすいまちをつくると考えるか… 全体を見て、その中に仕事の意味を見出す必要がある。

京都の市民がいい家に住んでもらえるように、木を削っている。幸せに住んでもらえるように日々仕事をしている。私も、教育委員会にいた頃、

生涯学習に携わりたいと考えていたが、そればかりはできなかった。単純な作業、書類の山に追われる日々でも耐えられたのはその書類の向こうに市民の姿を見ていたから。市民のために、京都のまちづくりの一環として木を削り、柱を磨くという思いで頑張ってもらいたい。

メンバー 学校の活用について、地域に会議室を開放するなど、私はもっと積極的にしていっていいと思うのだが、もしかすると古い考え方もかもしれない。市長はどう思われますか？

市長 京都市は、すべての学校で「学校ふれあいサロン事業」を実施して、市民の皆様に教室等を開放している。また、保護者や地域の方が学校運営に関わるコミュニティスクールも実施している。

地域と行政とが、同じ目標を持って、一緒に取り組み、共汗すると達成感がある。ここの皆さんが議論していることと、市民の皆さんが話していることは同じ方向を向いている。包括できると思う。自信をもってほしい。突破力を持って進んでいくことを期待する。

4つのユニットとも、よく考えて、いいことを議論している。

この10年間で、産業分野など滋賀県や久御山町に先を行かれていることはある。これから策定する基本計画は視点を明確にして、進めていくことが重要だと思う。

メンバー ありがたいチャンスをいただいた。新しいことをやろうとすると摩擦が起こるかもしれないが、自分達の向いている方向が正しいというお言葉をいただいて、より好きなことをやっていきたいと思えた。

メンバー 市民の皆さんと同じ方向を向いていることは、私自身も感じている。しかし、できていない現実もある。区役所にいたときに思ったのだが、外に出て行けば行くほど市民との関係はお互いに理解が進み、好循環だった。

区役所の窓口では最初から不満を持って来られる方が多いため、対峙関係となることも多いのだが、チーム活動として実施した市民アンケートでは、こちらから市民の皆さんに声をかけて、一緒に考えながら意見を聞くことができ、市民の方と同じ方向を向けた。問題が顕在化する前に、市民の方と一緒に考える機会を作ることが重要だと思う。

市長 市役所の外で市民と一緒に考えていくことが大切である。未来まちづくり100人委員会での議論は、皆さんが議論していることと同じ方向を向いている。市民の方に力をどれだけ発揮していただけるかが重要である。

行政指導ではなく市民の方に率先して行動していただける仕組み作りが

必要である。

メンバー 区役所に市民の方が集まるオープンスペースを作ってはどうかと思うが、そういった新しいことに取り組むことは反対等もあり大変である。ある日、マクドナルドでおばあさん3人がコーヒーを飲みながら、「今日も来たん？」と話している場面を見た。その様子を見て、新しいコミュニケーションの場だと感じた。今、そういう場所がないのかもしれない。

メンバー Aユニット「創造都市」では、中小企業支援を考えるに当たって、そもそも京都市が介入すべきなのかというところから議論に入った。税金を投入してやるべきことは何か。どこに力を入れて取り組めば良いと思われませんか。

市長 市場原理だけではやっていけない、助成する意味のあるものと投入した税金以上に収入に反映、又は、雇用に結びつくことの2点を考える必要がある。明治のころ京都市は国のお金を使って産業や水道事業など画期的なことをやってきたのである。

観光振興に関しても従前の枠にとらわれず、もっと思い切ったことを言ってほしい。世界遺産では姫路城に負けた。近代化遺産を狙っていきたい。インクライン（疎水）を世界遺産にしたら、疎水も平安神宮もみんな世界遺産になるという案も聞いたことがある。もっと思い切った案も欲しいな。

メンバー 私は自転車政策について検討しており、交通政策について、パリのベリブのような「都市型レンタサイクル」案を出しているのだが、そもそも市民のためになるかがはっきりしない部分もあった。しかし、先日の未来まちづくり100人委員会で同じような熱い思いを持っている市民の方がいて心強く思った。ところで、市長は自転車に乗られますか。

市長 最近は着物を着ることが多く、あまり乗っていない。自転車に乗れるような装具も持ってはいるのだが・・・

メンバー 着物でも乗れる自転車という案もあるのでは？

市長 京都のまちは、自転車のまちというのは無理がある。自転車と人と自動車とそれぞれ走る部分を作ろうという提案もあり、それぞれをどう生かすかが大切。大いにやってもらいたい。マナーの問題もある。パリは20万円位する自転車を買う文化もあり、乗り捨てなど起こりにくい、日本では自転車が比較的安く買えるため、放置自転車が減らないのかもしれない。自転車の免許制度なども考えられるのでは？

メンバー 自転車マナーの向上は大切だと思う。

市長 自転車は非常に有効な移動手段であるが、子供や高齢者など弱者の乗り物でないことも確か。そこをきちっと押さえて、どうやって共生していくかが大事である。

メンバー 市民と行政の考え方にギャップを感じることはありませんか。

市長 地下鉄の無料券を配布したらどうか、との意見を聞いた。できるものならやりたいが、地下鉄の通っている所と通っていない所の地域格差があり、税金を使うべきものではない。民間鉄道事業者の圧迫にもなってしまう。総合的に考える必要があり、思いつきだけの議論ではだめである。

地域で半分くらいまではやる。どうしてもできないところを行政が支援する。行政に対して、なんでもやってほしいというものではだめではないか。行政が主体となって行った事業はほとんど破綻している。まずは地域等が主体となり進めることが大切だろう。地域の、あなた方が京都のために何をするか。その為に、行政に何を求めるか。それに対して行政がいかに関与するか。この発想が必要。例えば、「コミュニティバスを走らせて欲しい。」ではなく、自分達で走らせるから、また、ここまでは行政にどういう支援をして欲しいかを地域の人たちが考えなければならない。京都市が置かれている財政状況を踏まえると、だめなものはだめということも必要。それよりもまず、京都市の財政状況や政策を知ってもらえていない。仕方がないところはある。京都市は市民参加推進条例を定めるなど、市民の市政参加については最高水準にある。ところが市民の方はそう思っていない。テレビや新聞だけを見ているところもある。

メンバー 財政状況が厳しいこともあるなか、基本計画もバランスが大切。課題に優先順位を付けたらどうかと思っているが、いかがでしょうか。

市長 民間では商品などを売るためにターゲットを絞っていく。しかし行政では、あらゆる人を対象にしなければならない。政策を融合することによって進めていきたい。例えば、お年寄りが生き生きしている、参加している、お年寄りが元気な街、これがひとつのポイントとなる。これが地域の振興にも、観光にもつながるようにしたい。京都市役所は全国で一番スリムな組織なのに熱のある仕事をしているという働きをしたいものである。

メンバー もう少しハメをはずそうという姿勢を持っていきたい。不況のどん底での気持ちで描く未来像ではなく、もっとイメージを膨らましていきたい。

メンバー 今、やっていることは間違っていないということを、ユニットのメンバーに伝えたい。

メンバー 私も以前から市民と行政のギャップを感じていた。自分も一市民として、取り組んでいく必要があると実感した。

メンバー 自分のユニットは、自転車を活用したライフスタイルを検討しているが、京都市民約147万人のライフスタイルを考えるので大変なことだと思う。気を引き締めていきたい。

メンバー 日常業務の中で京都市の未来像を考えるということはなかなかない。全庁から若手職員が集まったこういったプロジェクトチームは、新しい風を入れることができる非常に良いシステムだと思う。今後もこういったスタイルを続けて行って欲しい。

メンバー 市民に対して、市が何をしているのか、アピール不足なところもあると思う。

市長 プラスワンネットワークを実践してほしい。つまり、自分の仕事、生活の他に地域で何かをしてほしい。地域でなくてもいいが、人とのつながりの中で啓発することになる。市役所の人間が啓発の役を担うのである。色々な意見を言うてくる人は見方によれば逆にとても力になる。職員一人ひとりが市民に市政参加を促すことが大切。市政参加とは、市民活動をする事。行政に参加することだけではなく、地域のために働く、地域活動に参加することである。門掃きも市政参加の一つ、まずは市職員が実践してほしい。

コーディネーターとして、自分で名乗り出て参加してほしい。こういったサークル活動を広げて行って欲しい。そのほうが面白い。これからも頑張ってください。

以上